秋田県立博物館研究報告　第８号　47－56ページ　1983年３月

画僧白雲の作品について

太　田　和　夫

まえがき

画僧白雲は，第28世の六郷本覚寺住職として秋田に赴任してきた。彼の業績は僧職としてではなく画家として後世に遺されているのである。

白雲作品の特色は，真景図に最も見い出せる。彼の真景図は，単なる江戸後期の伝統的な日本画ではなく，写生的態度をふまえた近代性をもつ。この写生画ともいうべき真景図を生み出す背景には，白雲が南画の筆法に熟達していることがあげられる。その熟達には，諸国を巡歴し，多様な古画に接し研究したことが，大きく影響しているのである。

このような白雲の特色を基底にすえ，去る昭和56年に行った美術部門「白雲展」の時の調査をもとに，秋田県内にある作品を分類し，個々に検討を加え報告するものである。

Ⅰ)では，白雲のおいたちを既存の研究文献をもとに述べ，Ⅱ)以降の作品解説の補助的な役割をもたせた。白雲については，出生地や幼少年期に不明な点が多い。この解明には，現段階では筆者の力が及ばず，今後の追跡調査に期する。

Ⅱ)では，南画系の山水画をまとめ論じ，Ⅲ)では，真景図の特色を探り，Ⅳ)では，花鳥画，人物画など諸作品について述べる。

白雲作品は，全国に散在しているが，本稿では，県内に遺存する作品のみを取りあげ，今後県外に存する作品と比較検討の一助になれば幸いである。

Ⅰ　白雲のおいたち

白雲上人は，良善教順と称し，法諱逸譽[1]。雅号には，白雲のほか閑松堂，松堂，蝸牛庵，蝸牛叟，無心，竹堂がある。

白雲の出生及び幼少年期については不明だが，僧侶として数ヶ所の寺に勤めたことは判明している。その経路を順を追って述べてみよう。

白雲は，まず寛政年間に白河松平家の内寺の住職となる。寛政６年に松平定信が幕府老中職を辞し白河藩を継ぐ。ここで，定信は白雲を重く用いるようになり，後の定信編纂するところの「集古十種」に深く関係をもつことになった。寛政12年には，東林寺が焼失するにいたり，松平家は霊廟を常宣寺に移した。これとともに，白雲は22代目の住職として同寺を継いだ[2]。のち文化３年には，常宣寺を隠退し，のち須賀川十念寺の第19世住職となった。かくして文化９年には，秋田六郷本覚寺に入ることになる。その前に黒羽長生寺に住したと伝えられるが確証はない。また六郷本覚寺に入る経緯については不明だが，秋田藩９代佐竹義和の「あずまの記」文化３年の項に白雲と会ったことが記されていて，佐竹家との関係もいわれてきたが推測の域を出ない。

文化10年には，久保田で晋山式を行い東光山本覚寺第28世住職に就任したのである。本覚寺は，もと栃木圓通寺の末山で天台宗であったが，等譽上人の代に浄土宗になる。この寺は，もと元本堂村に藤光山本覚寺としてあり，慶長八年に佐竹義重が六郷に住し周辺の寺を集めた折，現在地に移った[3]。

本覚寺では，僧職をつとめるかたわら画僧として近隣の美術愛好者と交友し，とくに大曲の富豪齊藤衆憐とは親しかった[4]。白雲遺品中，衆憐蔵印のものがみられる。

文政８年白雲は62歳をもって死去するが，その前年に亞歐堂田善に肖像画を描かせている。これは，現在も本覚寺にあり，白雲の姿をみる事ができる。田善は当時の洋風画家として有名であったが，この肖像画は伝統的な筆法で謹厳に描いている（図１）。款記には，文政七年甲申十月閑松堂門人東嶽謹画とあり，田善との師弟関係も明らかとなっている[5]。

白雲の経歴において，最も充実した時期は，常宣寺時代に定信の信任を得た時であろう。その命によって，南は九州，北は秋田まで諸国を行脚し古美術を調査して歩いた。その折々に沿道の風景を写生し，その作品が今日まで真価をみせている。

Ⅱ　山水図

この項では南画筆法が色濃く反映している山水図作品を論ずる。県内に遺されているこれらの作品の一部を次にあげてみよう。

①水亭春望図　紙本淡彩　(タテ)82×(ヨコ)27cm　(款記) 水亭春望己夘夏日写　松堂　(印章)白文方印二顆　墨痴□□　白雲□□

②梅花書房図　扇面紙本着色　乙亥冬日　松堂写　印章二顆

③山水図　扇面紙本着色　文化丙子夏日　白雲　印章二顆

④寒山白屋図　紙本淡彩　28×38.5　寒山白屋　白雲　朱文　白雲

⑤山水図　紙本淡彩　36×43　庚辰四月写於□□　白雲　朱文　白雲

⑥山水図　紙本淡彩　102×28　白雲　朱文白雲

⑦富嶽図　絹本淡彩　32×49　白雲　朱文方印二顆

⑧富士図　紙本淡彩　41×60.8　白雲写　朱文方印二顆　白雲杜多　無心

⑨富士図　紙本淡彩　58×83　倉澤眺望　文化庚午秋日写　白雲　朱文方印　山川之図　白文方印□□□□

⑩梅村帰漁図　紙本着色　121×56　梅村帰漁庚午初秋白雲造　朱文方印　白雲　白文方印　□□弟山

⑪山水図　紈本着色 121×34　松堂白雲　白文方印白朱文方印雲

⑫山水図　紙本水墨　38×57　庚午冬日写法米家筆意　白雲　白文方印二顆　白雲　□□

①の水亭春望図（図２）は，同じ構図のものが白雲遺品中の「図画抜華　山水画石法　全」（図３）に含まれている　。この帖は白雲の粉本構成を証拠づける資料である。作品内容は，淡墨のやわらかな線描を主に，白群と岱赭をごく控えめに用いる。款記の干支によると文政２年の作で晩年に近い。同じく②の梅花書房図も「図画抜華」中に書房梅花と題する同様の図が収められている。梅花咲きほこる中に茅屋があり，高士がいる。南画山水によくあらわれる図である。白雲はこの種の絵を，需めに応じ描き与えたと思われる。先にあげた12幅の作品いずれもその性格が強い。自ら描き所持する粉本により，季節や好みの図柄に合わせ構成している。文化12年の作で，本覚寺に赴任して間もなく近隣に画僧の評判が広まっていたのである。

③の扇面山水図も，「図画抜華」にある図と同工異曲のもので，しかも⑤と⑥の山水図と近似の構図と筆致である。画面中央に樹木をすえ，その樹木の描法において③と⑤は「芥子園画伝」中にみられる三株画法，⑥は五株画法の構成で，描写は③と⑥は側筆が多く用いられ，⑤は点葉と夾葉の２法を用いる。賦彩はいずれも淡彩で，岱赭，草，白群，藍である。⑥の樹幹には朱が点じられ紅葉を表現しているかのようだ。制作年は，③が文化13年，⑤が文政３年と款記があり，おそらく⑥も同時期と推定できる。

⑦の富嶽図は，絹地の保存状態が悪いが，天高くそびえる富士を画面中央に大きくすえ，山麓にひろがる湖と丘陵が描かれ，小画面ながら雄大な富嶽の描写に成功している。⑧の富士図は，⑦と同じ構図だが湖に帆船を浮かべ情緒ある山水図となっている。⑨の倉澤から眺望した富士の図（図４）には，写生の影響が出ている。画面向って左前部に描かれた家並と点景人物に奥への拡がりがみられ，伝統的な深遠法とは違った表現になっている。

⑩の梅村帰漁図は，文化７年制作で梅と岩の配置に変化があり，色調は澄んでいる。

⑪の山水図（図５）は県内に遺される作品中最も秀逸な作である。他の簡潔な山水画に較べ描き込みが強く，多種の樹木，家屋，岩山には南画筆法の粋を集めている。また，光沢のある紈本地を使い墨のぼかしに微妙な効果を与え，賦彩は透明感のある色調となって画質を高めている。

⑫は「米家筆意」と款記にあるように，米点で描かれた水墨山水図である。単なる米点山水におわらず，小画面に広大な山水空間を表現している。

以上，山水画作品12幅について順次おってきたが，白雲の作画上の基礎にあるのは，漢画とくに南画の筆法にほかならない。次に論ずる写生図にしても写生を重んじた作画であるが，筆致そのものは南画筆法である。この伝統的な筆法に習熟していたからこそ，新し

い洋風画の感覚をとり入れる事が可能であり，また鑑賞に耐えうる作品にすることができたと考える。

Ⅲ　写生図

白雲は，松平定信が編纂した「集古十種」に参画し，諸国を巡遊し，当代の谷文晁をはじめとする画家文人と交遊をもった。本覚寺所蔵の白雲遺品に拓本帖があるが，関西から九州にいたる古社寺の宝物の拓本が貼付られ白雲の行動範囲がわかる。この巡遊の際に，各地の名勝を白雲は写生し遺している。彼が今日取上げられなければならない理由は，まさにこの写生図があるからなのである。

筆者が接見した秋田県内所在の写生図は，「奥羽街道並久保田藩内沿道風景写生帖」，本覚寺蔵の「真景帳」，「名山十八景」の三点である。

「奥羽街道並久保田藩内沿道風景写生帖」は，乾坤２冊になっており，佐竹家旧蔵と伝えられる。内容は次のとおりである。

〈乾冊〉栗橋渡望日光山図，古河松原望日光山図　宇都宮松原望築波山図　鬼怒川渡舟図　喜連川城下入口図　自作山至干大田原途中図　大田原城下入口図　鯉堀本陳後閑居寮見鍋掛図　自白川至干小田川途中図　上浅川図　自小坂不動堂駿阿武隈川図　材木岩図　渡瀬橋図　山伏嶽図　自山形干天童途中□村図　天童入口図　赤坂図　院内山図　神宮寺舟渡図　桧山脇不動並瀧図（21図）

〈坤冊〉寺内道五輪ゟ土崎濱望図　傘岩眺望図　小清水茶屋より三蔵鼻見図　新関村天神社　大川舟渡図　三倉鼻ゟ天瀬川村眺望　大内田追分山より能代見　唐船番所より向能代眺望　唐船番所より男鹿山眺望　能代住吉図　八森不動瀧図　同不動より男鹿山見　糠山より下波打図　糠山より椿村図　岩館図　濱田村岩屋不動図　白井村より切石村眺望　荷上場より駕籠山眺望　七倉天神ゟ小繋むら一里渡眺望（19図）

筆致は，全図を通して南画描法，賦彩は淡彩で明るい色調である。描かれている場所は，埼玉にはじまり栃木，福島，宮城，山形，秋田である。秋田の場所は，全44図の内22図で他より圧倒的に多く，来秋してから描きあげたものと推定できる晩年に近い制作である。

作画上の空間処理に関しては，随処に透視図を念頭においた描写がある。顕著な例は，宇都宮松原望築波山図（図６）上浅川図　糠山より下波打図である。また，海岸線の拡がりを巧みに表現している図に，三倉鼻ゟ天瀬川村眺望図（図７）唐船番所より向能代眺望図　糠山より椿村図などがあげられる。いずれも，前山より深奥を見る視点で，山水画の平遠深遠の描法である。さらに鳥瞰図のような視点もある。

描かれた具体的な対象には，形のよい山や岩，瀧，海岸線，舟渡の光景が多くあげられる。角間川の舟渡図は，当時の風俗資料としても貴重である。

以上の写生図連作を，白雲がどのような意図で行ったかはわからないが，旧藩主佐竹家に旧蔵されていたことから，藩との関係も考えられなくもない。また，ほぼ同時期に，「秋田風俗絵巻」を荻津勝孝が描いていたり，那珂碧峯の「風俗問状答」，そして菅江真澄の秋田紀行が存在し，寛政文化文政の頃の文化的な風潮の所産なのであろうか。

次に本覚寺所蔵の「真景帖」に移る。この真景帖は昭和31年に秋田県の文化財に指定されているが内訳は次のとおりである[7]。〈（　）内は筆者〉

碓水郡原市村図２葉　批把久保望妙義山図（眼下に笛吹峠を配し遠くに築波秩父妙義山を望む図）浅間山図　諏訪湖図　岐岨川上流見桟道図　岐岨川下流見桟道図　岐岨川下流見桟道図　岐岨川急流図　寝覚渓図　小野瀧図　村婦一人牽馬三疋壮馬在外岐岨山中苗代ナラス如此図　兼平出城山古関墟図　関ヶ原地理図　（峠の図）　近江伊吹山加賀白山図　自勝手村至岩屋観音図　岩下大田川急流図２葉　摺針峠望琵琶湖図　（鏡山付近の図）　叡山要宿図　詩仙堂図（詩仙堂の平面図）　京師図　嵐山渡月橋図　臨川寺望法林寺図　奈良坂卒都婆石　大内陵天武持統合葬俗称丸山図　池尻村益田池碑趺名俗称大石社又舟石ト云図　石人□四軀一石人前後割人形或二或三高三尺餘図10葉。

全図通して，墨線主体の描写で，後図巻にまとめるための写生図であろう。簡略な線でまとめ，自然景観の縮図ともいえる。なかでも，噴煙をあげる「浅間山図」（図8）鳥瞰図の「京師図」は，広範囲な景観を実に要領よく縮写している。ただひとつ木曽川の急流図（図９）だけが異色で，急流の水面のみを接写している。流れを表わす線の起伏が柔軟で，実写でなければ表現できない臨場感をもっている。

筆致は他の写生図と同じく南画の手法を用いている。

この項の最後に「名山十八景図」を述べる。この十八景は，箱書に「陛下御巡幸之□　明治十四年　御宿泊屋主　羽後国醍醐村　伊藤謹書」とあるように，明治14年明治天皇が巡幸の際，天覧に供したものである。その後，伊藤氏より所有が移ったが，現在は十八景の内1図が散佚し17図になっている。

内訳は，信濃浅間山図　信州御嶽図　野州日光山図　相州二子山図　相州大山図　遠州秋葉山図　駿州富士山図　伊勢二見浦図　伊勢岩戸山図　紀州高野山図　近江比叡山図　丹後天橋立図　但島鷹濱図　播磨舞妓濱図　備前瀧口山図　備後尾ノ道図　周防室積図である。

この真景図の特徴は，前述2種よりも南画的筆致，筆意が強く出ているところにある。描線は緻密で，とくに山襞の扱いに気を注いでおり，色彩においては，画面全体に岱緒がかけられ，白雲写生図中画質の異なる作品である。

空間処理には，遠近感がよく出ている図があり，「伊勢岩戸山図」「但馬鷹濱図」(図10)「周防室積図」などがその好例である。前景に山，遠景に海と地平線を描ている。また，噴煙をあげる「信濃浅間山図」(図11)は本覚寺本の図とほぼ同様で，おそらく本覚寺本が粉本となっているものと考えられる。

さらに，点景人物が配される図が多く，名勝風景の実在感がよく出ている。

以上3種の真景写生図の作画上の特色をまとめてみると，筆致は南画の筆法によること，賦彩は淡彩で墨線が主体になっていること，構図のとり方に西洋画の遠近法に近い要素があること，の3点がいえよう。

伝統的手法に基盤をおきながら，空間構成に近代的要素を含んでいる点で，白雲は近世洋風画人の一郭に入る。

Ⅳ　諸作品

白雲は，山水図・写生図を得意としたが，この他花鳥図，墨竹図，人物図なども描き遺している。ここでは，これらの諸作品をあげ，作風について述べる。

①臘梅図　紙本墨画淡彩　タテ129×ヨコ51.5cm（款記）晴香浮動月黄昏文化午秋八月十又三日　白雲（印章）朱文白雲

②梅花図　紙本水墨 101×37.5　文化壬申秋日　松堂白雲写　朱文方印二顆　白雲杜多　無心

③花鳥図　紙本着色　115×36　白雲　朱文白雲

④墨竹図　紙本墨画　130×28.8　墨癡　朱文方印二顆白雲杜多　無心

⑤墨竹図　紙本墨画　136×28　松堂　朱文白雲

⑥露凝寒葉図　紙本墨画　29×42　白雲　朱文白雲

⑦松之図　紙本着色　松堂　白文方印松堂

⑧竜之図　絹本墨画　109×35.4　松堂白雲写　朱文方印二顆　白雲杜多　無心

⑨帰牧図　紙本淡彩　128×30　瓢形老人なる者の俳賛　閑古鳥影も宇川左寿山乃池　墨癡　朱文墨癡

⑩拾得図　紙本淡彩　70.5×26.5　松堂閑人写　白文方印松堂

⑪七言律詩書　紙本　94×29　白雲印章二顆

「秋色平分月正圓　穿簾氷影更嬋娟　廣寒宮浄銀河冷　儛掌盤高玉露鮮　蟋蟀哀聲然壁上　桂華香気満欄前　莫言向暁慇懃賞　若欲今宵又隔年」

臘梅図（図12）は，文化7年作で，樹幹の筆勢，のびきる枝の力強い描線，玉のような花の表現，背後の樹木の淡墨，月を表現する隈取りなど白雲の技術を結集している。②の梅花図も絹本に同様な描写である。

③の花鳥図（図13）は，この種の作としては県内唯一のものである。芙蓉の花と川蟬の賦彩は白雲得意の淡彩で，芦の葉を墨に藍を時折まぜ暈している。構図は，川蟬と芙蓉を三角形で結び，芦の葉の繁みを向って右中央から左下へまとめ，中央から左上に高くのびた芦を描く。安定感のある構図に変化をみせている。

墨竹図3幅は，描法がほぼ同様である。竹の図については，かつて白雲が大仙寺を訪れ，寺の所蔵する絵を模写したことがあり，その大仙寺の所有物に竹図が含まれていることが，西村貞氏の調査で判明している[8)]。

葉は墨の濃淡で表し，幹の線描はよどみなく墨竹画法の手本のようである。

竜図（図14）は，白雲作品中異色の類で，墨雲渦巻く中に金泥で龍が描かれている。墨の暈しや濃淡で雲の流れを表現し，墨と金と対比が鮮かである。

帰牧図は，墨癡落款で筆致からしても若いころの制作と推定できる。柴を背負った馬と牧人を描き，俳句賛の意と融合している。筆致は四條派に通ずるものがある。

拾得図は，画面の傷みが激しく補筆されておるが，白雲の人物画は県内では少なく貴重である。

七言律詩の書蹟は，県内では文書類を除いては唯一の作で，端麗な行書の筆跡は白雲絵画作品の款記の筆跡に通ずるものがある。

以上諸作については，純粋な鑑賞画として描いたものだが，花鳥図・臘梅図で述べたように，技法上秀れた点がみられ，白雲の画家としての資質をうかがえる。

あとがき

白雲の絵画作品は，本稿で取り上げた他，まだまだ県内には存すると思うが，ここでは調査途次での論述に終る。また，白雲遺品に，本覚寺の彩絵方，小西家の文書資料，図画抜華　皴法帖　など興味深い資料があり，これらの検討を加えなければならない。

白雲上人については，大正六年平福百穂が世に紹介し，昭和20年には美術史家西村貞が「日本初期洋画の研究」を上梓し，その中で「画僧白雲とその写生図巻について」を論述している。本稿はこの西村論文に拠るところが多いが，県内の作品については，新しく紹介するものも入れた。

各作品解説には，多分に私見が出ているかもしれないが，大方の叱声をいただければ幸いである。

謝　辞

本稿執筆に際し，六郷町本覚寺・小西禮三郎氏のほか多くの所有者に協力をいただいた。また，調査に際しては，本館嘱託皆川忠彦氏をはじめ館職員の協力を頂戴した。ここに厚くお礼申し上げる。

註

1)「享和二年常州爪面常福寺泰譽授與血脈」　光明大師―源空―聖光―良忠―良曉―蓮勝―子實―子譽―明譽―盛譽―辨譽―英譽―乗譽―逸譽（傍点筆者）右累代相傳無相違授與弟子逸譽晁正守此旨信心稱名可被逐出離生死一大事素懐之状如件　享和二戊丑二月　常福寺五十四世泰譽（西村貞著「日本初期洋画の研究」420頁～421頁所収）

2)白川常宣寺過帳より　「廿一代檀蓮社忍譽上人含海和尚　寛政十二申歳御内寺焼失ニ付御霊屋當山ニ移ス貞順院殿為菩提観音堂庵室御建立中門再建享和二壬戌年十月隠居後水戸国安醫王寺ニ住職又谷中光臺寺ニ移轉文化六巳年蒙爪連蓮院住職。廿二代　逸譽上人含阿白雲和尚自ニ御内寺ニ移住文化三寅七月隠居。（西村貞著「日本初期洋画の研究」428頁所収。）

3)菅江真澄「月の出羽路仙北郡六郷諸寺院之部下十三巻　東光山本覚寺」　東光山本覚寺は下野国大沢ノ円通寺の末山にして，浄土宗門の寺也。此寺古真日箇嶽と一体同範の仏刹にて天台宗派たりしが，弘治の頃ならむ,中興常蓮社等譽上人の世より浄土宗門となりぬ。（略）慶長六辛丑年御遷封に依りて本堂の城主関東へ遷り給ふ。かくて後闕信公，六郷の駅の古城に御隠居ノ御館を造らひ給ふとき，近村に在る寺院みながらめし寄せ給ふによりて，慶長八卯癸年檀越の人々もあまた引具して此六郷のうまやに移り草庵をむすびて，ここに良玉上人数年を経て寂む。(略)

4)小西家文書　此画ハ浪花ノ大仙寺ノ所蔵三幅之一也寛政己未西遊偶與ニ兼葭堂主人濱田杏堂森川竹窓安田田騏ニ同ク訪ニ大仙寺ヲニ各模散帋ニ距今已ニ為ニ十八年ニ如ニ一夢ニ矣時々展玩シテ以楽友人齊藤衆憐風流始古請三刻以示ニ諸同好ニ予感ニ昔遊ニ并出ニ同ク摸スル者ニ以興　文化十三年歳在丙子八日既望　松堂陳人識。

5)亞歐堂田善は江戸時代の銅版画家・洋風画家として広く知られているが，白雲遺品の彩絵方にも銅版画技法について書かれている。しかし，白雲自身の銅版画作品は，今のところない。

6)図画抜華の表紙には，嘐齊蔵書と記されている。嘐齊については不明。内容は，26図の山水画と皴法12図が描かれている。白雲の粉本である。

7)本覚寺蔵「真景帳」は，「彩絵方」とともに県指定の文化財になっている。彩絵方の内訳は，彩絵方・絵用器具・秘事の三項目に分類され，白雲自らが見聞習得した絵画に関するさまざまな事がことこまかに箇條書されている。

8) 3)を参照。

9)皴法帖の表紙には，「十六葉皴法帖　菱華堂蔵」とある。菱華堂とは大曲の齊藤衆憐の事である。文字通り16種の皴法について描いたものである。奥付に「皴法十六葉文化庚午冬日松堂白雲写」，裏表紙に文化七庚午歳　衆憐蔵とある。文化７年には，まだ白雲は来秋しておらず，衆憐の款記には問題が含まれている。皴法図は次のとおりである。泥裏抜釘皴　披麻皴　牛毛皴　乳麻皴　鬼面皴　鬼披皴　荷葉皴　小斧劈皴

大斧劈皴　雨點皴　馬牙勾　弾渦皴　解索皴　礬頭皴　雲頭皴 。

参考文献

1.井上隆明著「近世洋画の技法的新資料」美術グラフ昭和43－44年掲載
2.内田武志　宮本常一編　「菅江眞澄全集第７巻」427頁－434頁　昭和53年　未来社
3.サントリー美術館編　「江戸時代風景スケッチ－真景図」展示パンフレット　昭和53年
4.奈良環之助著　「秋田画人伝画僧白雲」あきた昭和39年５月号　秋田県
5.成瀬不二雄　「江戸以後の関東・東北の洋画家」原色日本の美術25，221頁～227頁
6.西村貞著　「日本初期洋画の研究」418頁－488頁昭和20年　全国書房

図１　白雲上人画像

図２　水亭春望図

図３　水亭春望図
（図画抜華の内）

図4　富嶽図（倉澤眺望）

図5　山水図

図6　古河松原望築波山図

図7　三倉鼻ゟ天瀬川村眺望図

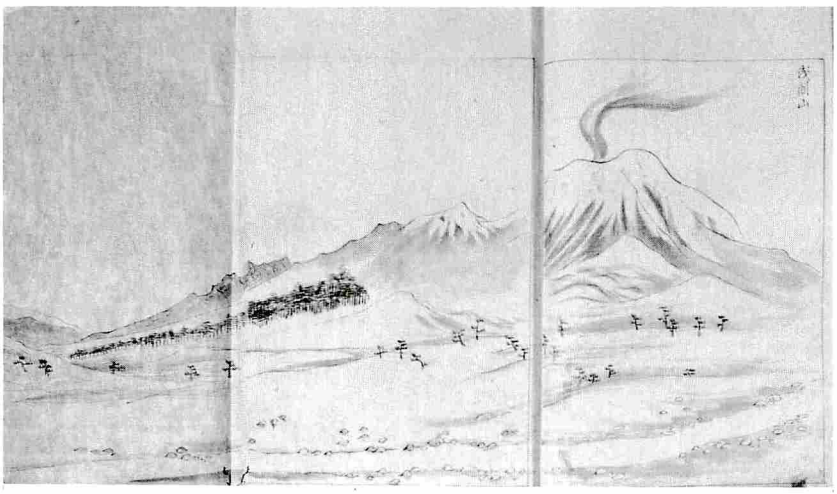

図8　浅間山図
（真景帖の内）

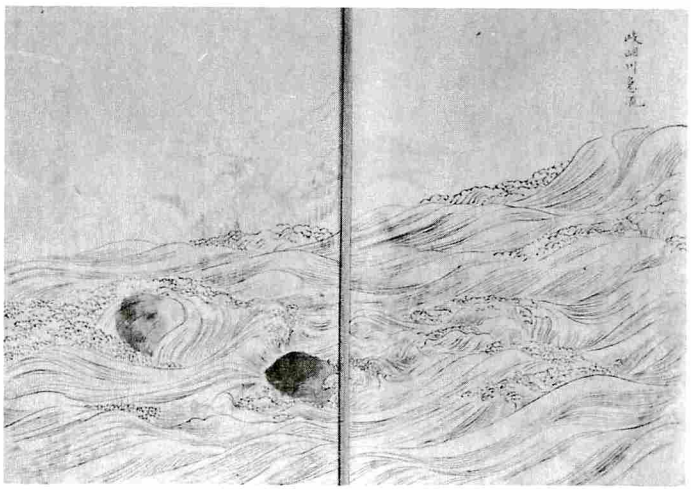

図9　岐岨川急流図（真景帖の内）

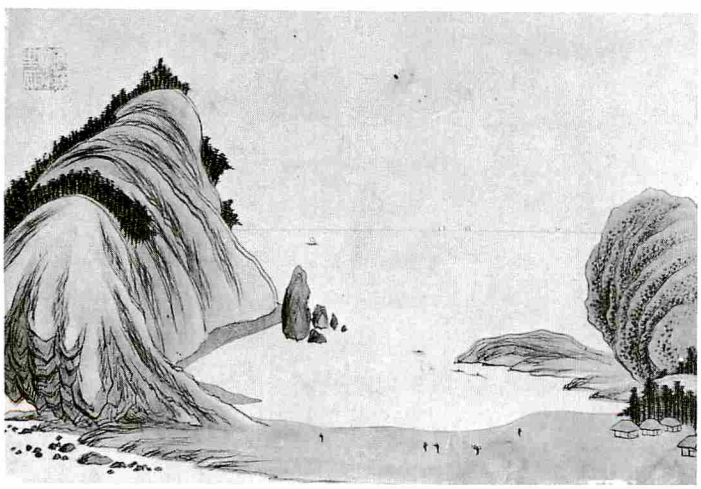

図10　但馬鷹濱図（名山十八墨図の内）

図11　信濃浅間山図
（名山十八景図の内）

図12　臘梅図

図13　花鳥図

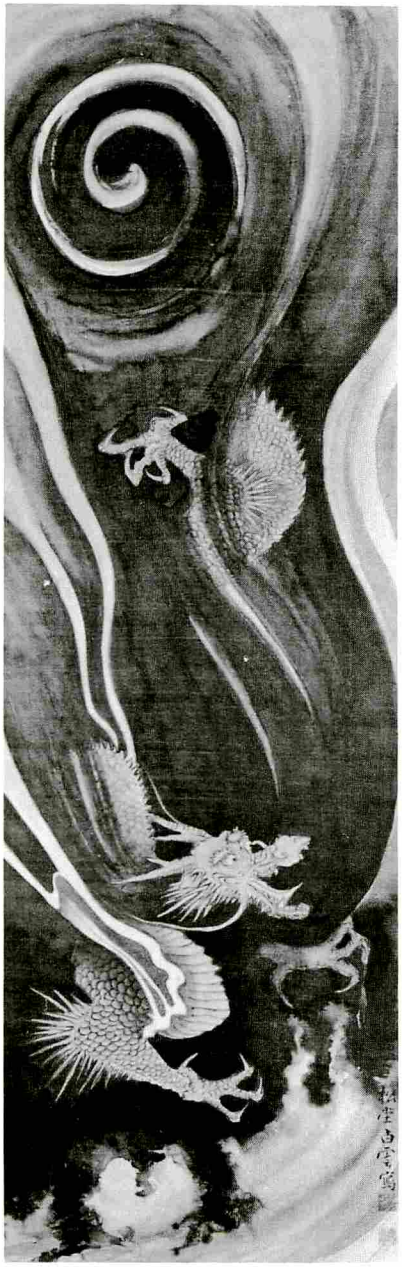

図14　竜之図

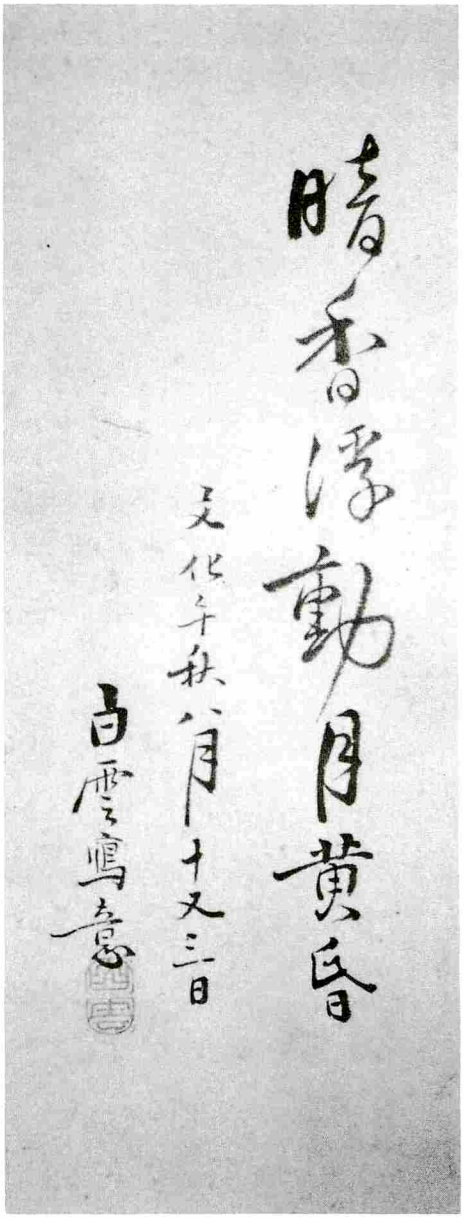

図16　臘梅図落款

図15　墨竹図落款